トドマツ枝枯病の危険（発病）地域とその薬剤防除

問　最近，10 年生から 15 年生位のトドマツ造林地で，トドマツ枝枯病にかかっている造林木が目につくようになりました。トドマツ枝枯病は，寒冷･多雪地域に多く発生・まん延すると聞いていますが，積雪深 100cm 程度の当地でも，まん延するのでしょうか。また，枝枯病にかかっている造林地への対策として，薬剤散布はどんなものでしょうか。

（稚内市　F生）

答　トドマツ枝枯病が見つけられるきっかけとなった，1970 年の大発生当初の発病地域は，指摘されているように，寒冷・多雪地域に限られていたようです。しかし，その後，発病地域は徐々に広がってきています。道北地方でも，トドマツ枝枯病はここ数年の間に，被害の面積も病気の程度もかなり拡大しています。新たな発病地域の中には，かならずしも多雪といえない地域が多くふくまれています。

積雪深と発病の関係をしらべるために，自然感染した鉢植苗木を道内の数箇所で越冬させる試験を行いました。その結果，積雪深が 50cm 以下の函館で越冬させた苗木にも，トドマツ枝枯病が発病することがわかりました。すなわち，積雪深が少ない地域でも，病原菌の密度が高くなれば発病し，徐々にまん延していくものと考えられます。しかし，病気にかかる枝は埋雪する枝に限られているために，雪の少ない地域ではわりあい早く，枝枯病の危険期間を抜け出ることができます。こうしたことから，雪の少ない地域での病気の程度は，多雪地域ほどひどくならないのがふつうです。

さて，トドマツ枝枯病に対する対策ですが，今のところ，発病を完全に防ぐ方法はみつかっていません。また，一度病気にかかった枝を治す方法もありません。したがって，枝枯病にかかった場合は，いかに翌年の病気の広がりを抑えるかということが，この病気の対策上，最も重要な課題になります。

薬剤による防除についても同じです。病気にかかった枝を，薬剤で治すことはできません。薬剤は，病気にかかった枝からちらばった，病原菌を殺すことによって，翌年の病気の広がりを抑えようとするものです。ですから，病気のかかりはじめの造林地で，病気にかかっている枝が少ないうちなら，むしろ病気にかかっている枝を切りとった方が，薬剤によるよりも，ずっと簡単で確実な防除方法であるといえます。

トドマツ枝枯病にかかっている林分への，薬剤散布は今のところ試験散布が 2，3 行われたにすぎない段階です。その中で，効果があったと判定される薬剤に，アクチジオン，ダコニール，マネブダイセンなどがあげられます。しかし，これらの薬剤についても散布の時期や回数，散布量や濃度などの違いが，発病にどのような影響を与えるのかはわかっていません。また，これまでに散布された薬剤のほかにも，効果のある薬剤があるかもしれません。これらの問題が解決され，トドマツ枝枯病に対する薬剤防除や基準が作成されるには，まだかなりの時間が必要です。

（道北支場　浅井達弘）